

詩部門優秀賞

## 数学の詩

盛岡第三高校3年 水上桃果

私の頭の中にあることは  
いつだってとつぴで複雑で  
そのくせ真剣で純粹だ

数学Aの教科書には  
付箋があつちでもこつちでも  
ほんの少しだけ顔を覗かせている

Xページ・Y行目には  
マーカーが何回も何回も  
繰り返し塗り重ねられている

「命題とその対偶の真偽は一致する」

このページの目印は  
付箋じゃなくて溜息のしおりにした  
はああ、と息を吐きかけるほど  
マーカーの色が滲んでいく気がする

教科書も嘘をつくんだと  
ちよつぱり安心して紅茶を飲んだ

私がつく嘘は薄くてしわくちやだけれど教科書の嘘は分厚くてまっすぐで羨ましい

「君が幸せならば私も幸せである」

こんな真の命題があったら私はそれに反例を叩きつけてやる  
そんなのはデマカセだし

簡単に覆くつがえってしまいうから

幸せの定義はわからないけれど  
きつと暖かくて甘くて優しいんだと思う  
冷めきつて苦くて鋭い私は  
きつとその幸せの外側にいる

「私が幸せでないならば君も幸せでない」

そんなことあるわけないじゃん  
きゅっ、とつぐんでも  
嘘つき嘘つきって  
言葉が口の中にまみれてしまいう

本当はあつて欲しいなんて  
微塵も思っていないからって  
強がってみせた  
私も嘘つきだなと自嘲する

「命題とその対偶の真偽は一致する」

教科書は今日も嘘をつく  
そんな嘘の対偶に  
私も嘘をついた  
嘘ばっかりで汚い

私はまた溜息を吐いて  
ベタ塗りの定義と  
その対偶を挟んで

教科書を閉じた。